

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 12 日現在

機関番号：37402  
 研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2009年度～2012年度  
 課題番号：21330146  
 研究課題名：世代間交流プログラムにおける人材育成のための実践的カリキュラムの開発  
 研究課題名：Development of a Practical Curriculum for Human Resource Development in the Intergenerational program  
  
 研究代表者 吉津 晶子（YOSHIZU MASAKO）  
 熊本学園大学・社会福祉学部・准教授  
 研究者番号：60350568

### 研究成果の概要：

本研究は、世代間交流プログラムにおける人材育成のための実践的カリキュラムの開発をめざして取り組まれた。世代間交流プログラムに携わる人材として保育者を想定し、その養成段階におけるカリキュラム案として、実習（クロス・トレーニング・プログラム）の試案をまとめた。プログラムは2年間に渡り実施された。試行実践の結果、次の3点が明らかとなった。

1. 高齢者とふれあう機会の少ない学生にとって、本プログラムは高齢者に対する認識を新たにするとともに、地域における福祉職という新たな「保育者像」を持つことのできる可能性
2. 保育士養成課程の中で学んできた科目を実践の場で再統合し、保育者としてより高い実践力を身につける可能性
3. 職員の動きからケアの対象者（子ども・高齢者）へのかかわり方を学び、「職員間の連携」によって情報を共有する重要性を学べる可能性

### 研究成果の概要：

We engaged in this research in order to develop a practical curriculum for human resource development in the Intergenerational Program. We assume human resources participating in the Intergenerational Program to be nurses, and we arranged a tentative plan for practice (the cross-training program) as a curriculum plan in the training stage. The program was performed over a span of 2 years. The results of the trial practice revealed the following 3 points:

1. The possibility for students who do not have many opportunities to interact with the elderly to use this program to renew their awareness of the elderly and to obtain a new “nurse image” in the shape of welfare jobs in the region.
2. The possibility to reintegrate the subjects the students studied during their nurse training through real practice to gain better practical skills as a nurse.
3. The possibility to learn how to deal with the subjects of care (children/the elderly) from an employee’s point of view, and to learn about the importance of sharing information by “links between employees.”

### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,400,000 円	720,000 円	3,120,000 円
2010年度	2,000,000 円	600,000 円	2,600,000 円
2011年度	1,100,000 円	330,000 円	1,430,000 円
2012年度	1,000,000 円	300,000 円	1,300,000 円
総計	6,500,000 円	1,950,000 円	8,450,000 円

研究分野：社会科学

科学研究費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：世代間交流，保育者養成，カリキュラム，人材育成，地域福祉，幼老複合施設，  
幼老統合ケア，クロス・トレーニング・プログラム

## 1. 研究開始当初の背景

近年，少子高齢の社会状況の中，「幼老統合ケア」という新しい形の福祉のあり方が生まれてきている。その背景にはいくつかの社会的なニーズの変化が考えられる。一つは少子化によって小学校や中学校における空き教室が目立つようになったこと。そしてもう一つは高齢者を預かるデイサービス等の福祉施設の拡充が必要とされるようになったことである。空いている所に必要とされるサービスを組み込んでいくというこの形は，平成5年4月に文部省が策定した「余裕教室活用指針」空き教室の転用によって様々な可能性が探られることとなった。余裕教室を保育施設や老人福祉施設などの学校教育以外の施設への転用などがその例である。また少子によって空き教室ができる一方で，女性の就労率上昇を背景に，保育所数の拡充や延長保育，児童の預かりといったニーズも増えてきている。

これらの社会的なニーズに「幼老統合ケア」という形のサービスが，地域コミュニティとの連携や世代間交流という考え方を背景に生まれてきている。これらの認識をもとに，「幼老統合ケアにおける世代間交流プログラムの開発」<sup>1)</sup>において世代間交流の調査および研究を進めていく中で，いくつかの問題点とその改善方法を模索する必要性が浮かび上がってきた<sup>2)</sup>。その問題点とは，さまざまな施設やコミュニティにおいて「世代間交流」の必要性が高いと理解されているのだが，実際に行なおうとする場合に，「環境調整」「物的資源」そして「人的資源」の確保において困難を抱えているということであった。特に重要とされた「人的資源」に関しては，世代間交流プログラムを運営する施設職員や保育士において，プログラム立案から実施，その後の評価に関して悩みを多く抱えているということが分かってきた。このような現状の中，世代間交流を支えていく人材育成のための教育と現場トレーニングのプログラム作りが喫急の課題である。

1) 吉津晶子（研究代表者）：「幼老統合ケアにおける世代間交流プログラムの開発」科学研究費補助金基盤研究（C）18500598，平成18年度—平成20年度

2) 吉津晶子：「第6章 文化を核とした世代間交流：音楽プログラムの可能性」、『世代間交流効果—人間発達と共生社会づくりの視点から』，三学出版，2009

## 2. 研究の目的

保育者にとって，子どもの育ちを支えると共に，子どもを取り巻く環境を調整する力が今後一層必要とされてくる。特に，地域に開かれた保育所という中で，保育内容の充実と

コーディネーターとしての企画力，そしてファシリテーターとしての実践力が必要である。すなわち子どもの発達に関する視点，地域の人々（成年，高齢者等）を理解するための生涯発達の視点，多世代の人々を結びつけていく社会的な視点を柱に，実際の保育現場における応用のきく保育者を養成するためのプログラムづくりの試案開発が本研究の目的である

本研究の具体的な達成目標は以下のとおりである。

- ・国内外のコミュニティや保育所との連携事業調査（問題点および課題点の抽出と検討）
- ・保育者養成プログラムの開発（試行と検討）
- ・具体的なカリキュラム化および養成校における実践（問題点および課題点の抽出と検討）

## 3. 研究の方法

- (1) 実地調査（国内・シンガポール・ハワイ等）と先行研究を通じた世代間交流における保育者（教員）の事例検討
- (2) クロス・トレーニング試案作成と実施・評価・再実施
- (3) クロス・トレーニング参加者に対するアンケート調査
- (4) 世代間交流プログラムの新規開発（自然観察指導・造形等）とその評価

## 4. 研究成果

### (1) 実地調査

#### ① Generations United (Washington, D.C.)

2009年，Generations United International Conferenceにおいて，世代間交流コーディネーター養成に関する資料の収集を行った。養成に必要とされる関連科目\*より，子どもから高齢者まで，そして助成金の獲得法といった，世代間交流の実践者として，また現場と運営を広い視野で見ることのできる人材の育成が想定されているということが分かった。

具体的な学習の目標\*\*としてあげられていたのが以下の項目である。

- ・世代間関係の重要性の理解
- ・社会的干渉モデルとしての世代間交流プログラムの正当性について
- ・世代間交流プログラムの計画作成
- ・異世代間交流プログラムの特徴と期待される結果の理解
- ・コミュニティにおける資源を活用するためのプロセスの開発
- ・世代間交流プログラムコンポーネントを

身につける基本的な方策の習得

- ・ 世代間交流プログラムの参加者およびスタッフを交えた訓練と管理の必要性を学ぶ
- ・ 世代間交流プログラム評価の概念について
- ・ 発表、論文執筆、研究スキルの強化

これらの調査より、多世代に対する学びについて均等に科目を配置していくことの難しさや、どのような基礎資格の上に世代間交流の学びを積み上げていくのかということが大きな課題であると確認された。

\*Susanne Bleiberg Seperson, Ph.D. (Dowling College):  
Master's Degree in Social Science: Applied Track in Intergenerational Studies (配布資料)

\*\*Kevin Brabazon, Ph.D. (New York University): *Lifespan Issues and Programs: An Intergenerational Perspective*, (配布資料)

## ②アメリカ合衆国ハワイ州 Seagull School (Kapolei 校)

世代間交流活動が先駆的に実施されているアメリカ合衆国ハワイ州 Seagull School (Kapolei 校)において、教員の支援を見出すことを目的とした。世代間交流活動の実施に伴う関係資料及び実際の保育場面からデータ抽出を行った。また世代間交流活動の指導の中心となる担当教員2名への面接を行い、データを収集した。その結果、以下の3点が教員の支援として重視されていることが明らかになった。

- 1) 指導内容や指導体制をわかりやすいように明示する
- 2) 幼児と高齢者の関係を固定化しないようにする。そのために、高齢者の知識を提供してもらえるよう教員自らが高齢者の知識を学び、高齢者理解を進めるとともに、幼児と高齢者が共通して興味を持って取り組むことができる活動を実施し、さまざまなかかわり方を保障する。
- 3) シニアアシスタントの高齢者・幼児と教員との間における役割をとらえ、協同的な指導を行う。

(2) クロス・トレーニングの試案作成と実施・評価・再実施

### ①クロス・トレーニング・プログラム

クロス・トレーニング・プログラムは、Rosebrook & Larkin(2002)の世代間交流プログラムスタッフの評価ガイドラインを参考にし、保育者養成のために仮デザインされたものである。具体的には、以下に示すRosebrook & Larkinの理論的枠組を充足するように配慮した。

- 1) 生涯発達についての知識と理解
- 2) コミュニケーション力

- 3) 協働のためのスキル習得
- 4) 関連領域の研究知見についての理解
- 5) 評価テクニック
- 6) 専門家としての適性についての理解

このような理論的枠組を踏まえる理由は、保育士養成の新カリキュラム(保育士養成課程等検討会 2010)における、a.「保育の心理学」の補完的な学びとして、子どもから高齢者までの生涯発達を見通すこと、b.「保育者論」における保育者の役割と責務に関する内容を、コミュニケーション力・協働のためのスキル・関連領域における研究知見についての理解と関連付けて理解すること、c.「保育課程論」における計画、実践、省察・評価、改善の過程についてその全体構造を能動的にとらえ、理解すること、以上の点を補完・強化するためである。

### ②クロス・トレーニングの実習デザイン

クロス・トレーニング・プログラムを実施するにあたって、幼稚園教員養成課程と保育士養成課程における実習と位置付け、その関連性を明らかにしている(表1)。また、この実習の特徴を以下のようにとらえている。

- 1) 保育について理解を深めるには、子どもだけではなく、子どもを取り巻く環境や地域との関わりを理解しなければならない。実習は、地域における保育所の役割と保育者のあり方を学ぶ場である。
- 2) 実習は、学習課題の発見の場であると同時に、理論的に学んだことを実践的に確かめる場である。

さらに、実習の目標は、次のように設定した。

- 1) 子どもと高齢者と実際にふれあい、実感的に両者を理解する(以下、「対象者とのかかわり」)
- 2) これまでの実習経験を活かした子どもとのかかわり合いを深める(以下、「実習経験の活用」)
- 3) 高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を学ぶ(以下、「高齢者の理解」)
- 4) 施設内における子どもと一日の流れを把握し、子どもと高齢者とのかかわり方を学ぶ(以下、「子どもと高齢者間の交流」)
- 5) 職員の動きを観察し、職員間の連携について学ぶ(以下、「職員連携の理解」)

実習の全体計画は、事前指導、本実習、事後指導の3期(図1)に分かれている。

実習の具体的な取り組みについては、全体の2/3を高齢者中心に、1/3を子ども中心にかかわることを基本としている。全体の生活プログラムに、観察実習だけではなく、職員の補助となる活動にも参加する。また、職員の動きを観察し、職員間の連携について

も学ぶ機会を設定している。

以上のプログラムを実施し、その結果、次の課題が導出された。

- 1) 高齢者と直接的に接するプログラム内容と高齢者理解のための知識を得られるようなプログラムの強化が必要であること。
- 2) 子どもと高齢者が交流する場への参加の保障。
- 3) 職務内容に関するプログラムの充実と実習先との連携強化。

表1 実習の位置付け

	幼稚園教員養成課程	保育士養成課程
H21年 2年次	教育実習Ⅰ (2単位必修) 観察・参加実習	保育実習ⅠA (保育所・2単位必修)
H22年 3年次		保育実習ⅠB (施設・2単位必修) 保育実習Ⅱ (保育所・2単位選択必修) 保育実習Ⅲ (施設・2単位選択必修)
H23年 4年次	教育実習Ⅱ (2単位必修) 指導実習 幼老統合施設におけるクロス・トレーニング (自主実習) 子ども家庭福祉実習 (幼稚園・保育所・施設 2単位選択必修)	

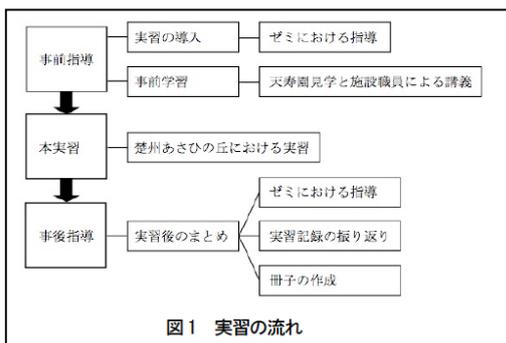


図1 実習の流れ

### ③修正プログラム

前述の課題を受けて、次年度におけるプログラムでは、以下の改善を行った。

#### 課題1：高齢者理解を深めるプログラム

「高齢者への直接的なかかわりと高齢者を理解するための内容を増設したプログラムの強化」については、事前学習を充実させた。高齢者へのかかわりに際して気をつけるべきことや姿勢等について、高齢者ケアの専門家からレクチャーを受けるプログラムを導入した。

#### 課題2：交流活動プログラムの充実

「子どもと高齢者との交流に参加・指導できるプログラムの充実」についても事前学習を充実させた。造形を中心としたプログラムを事前学習に導入した。

#### 課題3：スタッフカンファレンスへの参加

「スタッフが行うカンファレンスに参加で

きるプログラムへの修正」については、事前に職員（介護職・保育職）との調整を行い、施設内における連携のあり方を学ぶことのできる機会を設けることとした。

#### (3) クロス・トレーニング参加者へのアンケート調査

実習の達成度について表2に示す各項目において、「どのくらい達成できたと思いますか？」と質問し、「1：出来なかった、2：あまり出来なかった、3：普通、4：良くできた、5：とても良くできた」の5件法により回答を求めた。これによると、ほとんどの項目で「良くできた／とても良くできた」とする者が多く、「できなかった／あまりできなかった」とする者はほとんどみられなかった。

その他、質問項目1の「子どもと高齢者と実際にふれあい、実感的に両者を理解する」の自由記述の傾向から、a. アクティビティを通じた理解、b. 地域性を通じた理解、c. 身体的・精神的特性を通じた理解、という3つの視点から、子ども理解および高齢者理解が学生の中で深まったことがうかがわれた。

質問項目2の「これまでの実習経験を活かした子どもとのかかわり合いを深める」では、保育実習Ⅰ・Ⅱおよび教育実習Ⅰ・Ⅱにおいて学んできたことを活用し、積極的にかかわろうとする姿が見られた。

質問項目3の「高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を学ぶ」においては、質問項目1よりもより踏み込んだ内容になっている。高齢者個人との1対1のかかわりの中から学んだことについて見ることができる。自由記述の傾向から、a. 視覚・聴覚などの感覚器官に障害のある高齢者への支援のあり方について、b. 運動器官に障害のある高齢者への支援のあり方について、c. 傾聴の大切さについて、という3つ視点から高齢者のありのままの姿を受容し、接していくことの大切さを学んだことがうかがわれた。

質問項目4の「施設内における一日の流れを把握し、子どもと高齢者両者とのかかわり方を学ぶ」では、子どもと高齢者それぞれ固有の生活時間と、両者の生活時間が交わる場面という3つの生活時間の経験を通して、両者への理解やかかわり方について学んだことがうかがわれた。

質問項目5の「施設職員の動きを観察し、職員間の連携について学ぶ」では、a. 他職種との連携の実態について、b. 全体で情報を共有することについて、施設職員の動きや会話の中から学んだということがうかがわれた。

質問項目Kの「自己課題」では、本プログラム実施前に、学生それぞれが立てた実習課題の達成度を質問したものである。多くは、「子どもと高齢者とのかかわりについて学ぶ」や「高齢者理解を深める」という自己課

題であった。「2: あまりできなかった」と回答した学生は、これまでの子どもを対象とした経験と違い、高齢者とのコミュニケーションが難しかったとの反省を述べているが、その他は概ね自己課題を達成できたとの回答であった。

表2 実習の目標および自己課題の達成

Q1実習の目標および自己課題の達成度	1.出来なかった	2.あまり出来なかった	3.普通	4.良くて	5.とても良くて
1.子どもと高齢者と実際にふれあい、実感的に両者を理解する	0	0	0	7	1
2.これまでの実習経験を活かした子どもとのかわり合いを深める	0	0	1	4	3
3.高齢者の身体的・心理的・社会的特徴を学ぶ	0	0	2	4	2
4.施設内における一日の流れを把握し、子どもと高齢者両者との関わり方を学ぶ	0	0	2	4	2
5.施設職員の動きを観察し、職員間の連携について学ぶ	0	0	1	5	2
K.自己課題	0	1	2	3	2

#### (4) 本研究のまとめと課題

本研究の中心となる、世代間交流における人材育成をクロス・トレーニング・プログラムに求め、以下3点の可能性を導出することができた。

1. 高齢者とふれあう機会の少ない学生にとって、本プログラムは高齢者に対する認識を新たにするとともに、地域における福祉職という新たな「保育者像」を持つことのできる可能性
2. 保育士養成課程の中で学んできた科目を実践の場で再統合し、保育者としてより高い実践力を身につける可能性
3. 職員の動きからケアの対象者(子ども・高齢者)へのかかわり方を学び、「職員間の連携」によって情報を共有する重要性を学べる可能性

今後の課題は、より客観性の高い結果を得るため、継続的なクロス・トレーニング・プログラムの実践を積み重ねる中でデータの蓄積を行うことと、保育者養成において世代間交流の視点をもった保育者養成を行うために必要な、より具体的なカリキュラムの開発を行うことである。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計8件)

- ① 溝邊和成・吉津晶子, 保育士養成課程学生の世代間交流実習における自然観察指導に関する学び —ネイチャーゲーム: フィールドビンゴの項目および実習記録の分析をもとに, 日本世代間交流学会誌 Vol.3 No.1, pp.77-86, 2013 (査読有)
- ② 矢野真・田爪宏二・吉津晶子, 保育者養成における子どもと高齢者をつなぐ造形活動—造形活動を通じた保育者としての学生の学びを中心に, 日本世代間交流学会誌 Vol.3 No.1, pp.67-76, 2013 (査読有)
- ③ 吉津晶子・溝邊和成・田爪宏二, 保育者養

成課程におけるクロス・トレーニングの試み: 幼老統合施設における実習と参加学生の意識調査, 日本世代間交流学会誌 Vol.2 No.1, pp.71-80, 2012, (査読有)

- ④ 吉津晶子・溝邊和成, アメリカ合衆国ハワイ州 Seagull School (Kapolei 校) の世代間交流の特質, 日本世代間交流学会誌 Vol.1 No.1, pp.99-107, 2011, (査読有) <http://ci.nii.ac.jp/naid/40019560927>
- ⑤ 溝邊和成・吉津晶子, アメリカ合衆国ハワイ州 Seagull School (Kapolei 校) の世代間交流活動に見られる教員の支援 —実践資料、保育場面および指導教員への面接を手がかりに一, 日本世代間交流学会誌 Vol.1 No.1, pp.109-118, 2011, (査読有) <http://ci.nii.ac.jp/naid/40019560935>
- ⑥ 吉津晶子, 世代間交流と音楽, 音楽文化の創造 62 巻, pp.12-15, 2011 (査読無)
- ⑦ Yoshizu M., Characteristics of the Intergenerational Shared Site Programs in Japan and Hawaii, US, Joint Symposium between Chonnam National University & Kumamoto Gakuen University 2011, pp.1-15, (査読無)
- ⑧ 齊藤ゆか、大成哲雄、柴山英樹、関口明子、北沢昌代、神谷明宏, アートパークプロジェクトを通じた地学連携と学生参画の意味, 聖徳の教え育む技法 第5巻, 2011, pp.97-108 (査読無)  
[学会発表] (計15件)
- ① Yoshizu M.・Mizobe K., The Effect of Cross-Training for Childcare Worker Training in Japan, Generations United 17th International Conference, Washington Court Hotel: Washington, D.C. (U.S.A.), 2013年7月31日 (発表予定), 2013年2月20日 accept
- ② Mizobe K.・Yoshizu M., The Research for the Knowledge of Instructing Nature Game in the Cross-training Program: Based on the reports of the training and the bingo cards made by the students of the childcare worker training course, Generations United 17th International Conference, Washington Court Hotel: Washington, D.C. (U.S.A.), 2013年7月31日 (発表予定) 2013年2月20日 accept
- ③ 吉津晶子・田爪宏二・矢野真, 養成課程における実習教育の新たな試み —世代間交流を核として—, 日本保育学会第66回全国大会, 中村学園大学, 2013年5月11日
- ④ 吉津晶子・溝邊和成・田爪宏二, 保育者養成課程におけるクロス・トレーニングの試みⅡ—実習課題克服のための工夫, 日本世代間交流学会第3回全国大会, 名古屋芸術大学, 2012年10月6日
- ⑤ 矢野真・吉津晶子, 造形と音楽を中心とした表現領域の再考に関する実践研究 —「お

ととかたち」ワークショップを通じた学生の学びを手がかりに、日本保育学会第64回全国大会、玉川大学、2011年5月22日

- ⑥ Yoshizu M., Characteristics of the Intergenerational Shared Site Programs in Japan and Hawaii, US, Joint Symposium between Chonnam National University & Kumamoto Gakuen University 2011, Chonnam National University, Gwangju, Korea, 2011年5月28日
- ⑦ Yoshizu M.・Mizobe K., The Planning of Practical Cross-Training for Intergenerational Programs, Pacific Early Childhood Education Research Association 12th Annual Conference, 神戸国際会議場, 2011年8月2日
- ⑧ Mizobe K.・Yoshizu M., The Intergenerational Activities for the Kindergarten using the Traditional Drums in Japan, Generations United 16th International Conference, Washington Court Hotel: Washington, D.C. (U.S.A.), 2011年7月27日
- ⑨ 吉津晶子・溝邊和成, 保育者養成課程におけるクロス・トレーニングの試み I - 幼老統合ケア施設における実習計画と参加学生の事前調査 -, 日本世代間交流学会第2回全国大会, 兵庫教育大学, 2011年10月8日
- ⑩ 矢野真・田中文昭, 造形活動を通しての幼稚園と大学との協同活動が紡ぐ子ども、学生、教員の共育ち, 日本幼年教育会創立40周年記念幼年教育研修会全国大会, グランキューブ大阪, 2010年7月26日
- ⑪ 金田利子, 社会的保育機関(保育所・幼稚園など)の役割-世代間交流を通して考える-, 財団法人母子衛生研究会, 全電通会館, 2010年11月5日
- ⑫ 吉津晶子, ドラムサークルでつなぐコミュニケーション力~ドラムサークルにおける2つの事例からの考察~, 日本世代間交流学会第一回全国大会, 芦屋大学, 2010年8月7日
- ⑬ 吉津晶子・長坂希望, コミュニケーション力を育むドラムサークル~教育現場における2つの事例を通して~ Improving Communication Skills Through Drum Circle ~ Two Case Studies from Educational Settings~, 韓日音楽教育セミナー, 建国大学校(韓国), 2010年1月10日
- ⑭ 吉津晶子・石川武, 今, なぜ世代間交流が必要か「世代間交流を行う上で大切なこと」, 2009年度ころころの森人材育成事業「世代間交流コーディネーター養成講座」, 東村山ころころの森, 2009年11月6日
- ⑮ Yoshizu M., Possibilities of Music as a Tool to Connect Generations: Two Case Studies - "Warabe-Uta" -Japanese Children's Play Songs- and Drum Circle, Generations United

15th International Conference, Hyatt Regency Washington on Capitol Hill: Washington, D.C. (U.S.A.), 2009年7月30日

[図書](計3件)

- ① 草野篤子・内田勇人・溝邊和成・吉津晶子, 多様化社会をつむぐ世代間交流-一次世代への『いのち』の連鎖をつなぐ, 三学出版, 全185頁, 2012
- ② 矢野真・加藤道子, 保育園・幼稚園の年中行事完全マニュアル, 成美堂出版, 全159頁, 2011
- ③ 草野篤子・柿沼幸雄・金田利子・藤原佳典・間野百子(編著), 世代間交流学の創造 - 無縁社会からの多世代交流型社会実現のために, あけび書房, 全242頁, 2010

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉津 晶子 (YOSHIZU MASAKO)  
熊本学園大学・社会福祉学部・准教授  
研究者番号: 60350568

### (2) 研究分担者

溝邊 和成 (MIZOBE KAZUSHIGE)  
兵庫教育大学・大学院学校教育研究科・教授  
研究者番号: 30379862

草野 篤子 (KUSANO ATSUKO)  
白梅学園大学・子ども学部・教授  
研究者番号: 00180034

金田 利子 (KANEDA TOSHIKO)  
名古屋芸術大学・人間発達学部・教授  
研究者番号: 60086006

矢野 真 (YANO MAKOTO)  
京都女子大学・発達教育学部・准教授  
研究者番号: 00369472

### (3) 連携研究者

田爪 宏二 (TAZUME HIROTSUGU)  
鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授  
研究者番号: 20310865  
齊藤 ゆか (SAITO YUKA)  
聖徳大学・人文学部・准教授  
研究者番号: 20406747  
栗原 武志 (KURIHARA TAKESHI)  
熊本学園大学・社会福祉学部・講師  
研究者番号: 40435318

### (4) 研究協力者

石川 武 (ISHIKAWA TAKESHI)  
リズム教育研究所・専任講師  
長坂 希望 (NAGASAKA NOZOMI)  
武蔵野大学・非常勤講師